

文学的文章における個が生きる評価

— 1年生の場合 —

羽 場 邦 子

1. 1年生における「自己を高める評価力」

入学式の時の子供たちの表情を見ると、未知の世界に踏み出す不安と喜びが表れている。「1年生になって頑張ろう」という気持ちが、自己を高めようとする第一歩であろう。教師は、子供たちの不安を少しずつ取り除き、喜びを確かなものにしていくための助言や支援をしていく役割をしていかなければならない。入門期における読む・書く・話す学習では、「わかった、できた、やってみよう」などの成就感や意欲を一つ一つの活動を通して持たせることが大切である。例えば、ひらがなが書けた時、「よく書けたね」「正しく書けたね」などの教師の言葉かけにより、子供は、「がんばって書いた」「正しく書けた」と自分自身を評価し、学習に対して、楽しいな、おもしろいなという気持ちを持ち、それが意欲・関心・態度に結び付く。

国語の学習場面を思い浮かべると、教材によって、指導のねらいによってさまざまな活動を設定することができる。それらの学習で、1年生では、自己を高める評価力をどのようにとらえたらよいのであろうか。自己評価は、活動そのものに対する評価あるいは活動している自分自身の在り方に対する評価であり、学習のめあてを一人一人がつかみ、それに対する自分の活動を振り返り、さらに、次のめあてに向かうという過程を積み重ねて、自己を高めていくことである。1年生の児童は、興味あることや関心をもっていること、楽しいことなどには意欲的に取り組む。それらは無意識に行われることも多い。教師による方向づけにより、一つの活動に具体的なめあてを持つことは、無意識から意識化への変容を図ることになる。意識（めあて）を持って活動することにより、達成感や満足感を得ることができ、次の学習における意欲や自分なりの学習のめあて意識を持つことができる。そのことが、自己を高める評価力の基盤になると考えられる。教師による方向づけ、指導、援助は、子供自身の評価的な言葉に変わっていく重要なものとなる。1年生における自己を高める評価力の育成を図るために、次のような点に留意した。

- ① めあては、教材に対する児童の興味や関心、実態、学習の定着度などを考慮し、教師が援助しながら、児童に提示して学級全体あるいは児童個々のめあてとなるようにする。教師のねらいを、より具体的な学習活動として、児童に分かる表現で提示する。
- ② 活動に具体的なめあてを持たせることで、無意識の活動から意識化（めあてをもつ）の活動への変容を図る。
- ③ 児童は、具体的な活動に対して、活動しながら自己評価していくものとする。それらの自己評価は、教師による評価が基準となることが多いため、授業における形成的評価や児童の書いたワークシート、ノートなどに教師の思いを書いて返す。
- ④ 学習における行動や活動を中心に自己評価をさせる。
- ⑤ 教師は、児童の行動や活動から内面を評価する。

「自己を高める評価力の育成」という視点から、文学教材の実践を述べてみたい。

2. 1年生の文学的文章の指導にあたって

(1) 研究の視点

学習指導要領における国語科の第1学年の目標(2)には、「粗筋をつかみながら話を聞いたり、書かれている事柄の大体を理解しながら文章を読んだりすることができるようにするとともに、易し

い読み物を楽しんで読もうとする態度を育てる。」と述べられている。

国語科における読みは、自由読書と異なり、読解の指導が行われる。一人一人の児童の読みは個性的で広がりがある。特に、1年生という学年を考えれば、読む・書く・話す・聞くという言語活動の入門期であり、国語科の基礎・基本を習得する大切な時期である。併せて、それぞれの個が持つものの見方や考え方を、広げ・深め・高めるための学習もなされなければならない。児童の発達段階や実態を踏まえて、個の読みを生かしながら集団の読みで深め合い、さらに楽しんで読もうとする態度を育てるために、次のように考え、学習計画を立てた。

一人一人の個性的な読みを生かす授業の工夫や多様な学習活動を仕組んでいくことにより、楽しんで読もうとするのではないか。

(2) 具体的な方法

- ① 物語のあらすじをとらえる。
- ② 各学習場面でよかったところを見つけ、思いを話す。
- ③ 登場人物の気持ちや様子を読み取る。
- ④ 好きな場面を気持ちをこめて音読する。
- ⑤ 活動について振り返り、自己評価をする。

3. 本はともだち「ずうっと、ずっと、大すきだよ」(光村図書1年)実践の概要

(1) 単元について

本単元は、少年と愛犬エルフとの心の交流を軸として、エルフの幼い頃から死に至るまでの過程を少年「ぼく」やその家族の生活を通して描いている作品である。

幼い子供たちは、生き物が好きである。また、少年「ぼく」を、1年生の児童と同じ年齢の男子であると考え、愛犬エルフをその死に至るまで親友として大切に「ぼく」の気持ちに寄り添いながら読み進めていくものと考えられる。授業を行ったのは、2学期末の12月である。児童は、ひらがなの学習を終え、漢字や片仮名の学習も行っている。また、物語文を読んで、筋の展開をとらえたり、登場人物の心情や場面の様子を想像したりする学習も繰り返し経験してきている。個人差はあるが、音読・感想や吹き出しに思いを書くなどの活動にも意欲的に取り組む。お話を読むことに慣れてきてはいるものの文章表現をもとに、物語の筋をとらえたり、場面の様子や人物の気持ちを想像したりすることにはまだ抵抗がある。本単元は、片仮名の学習はあるが新出漢字がなく、読み易い会話体の文章で語られている。淡々とした場面であるので、人物の行動を動作化や劇化で表現するには適していない。しかし、行間に語られている人物の様子・行動・気持ちを個々の読みにより想像できる題材であると考えられる。

文章を自分なりに読むことができるようになってから、図書室で本を借りたり、教室に置いてある本を手にする回数も増えてきている。しかし、図書室に行くと、自分で本を選ぶことができない児童を見かけることがある。「本はともだち」という本単元のめあてをもとに学習をしていく中で、読書することの楽しさに気づき、進んで好きな本を選んで読み進めたり、友達や家族の人に読み聞かせをしたりすることができるように指導を行った。

(2) 指導目標

- ① 「ぼく」の気持ちを想像しながら読み、絵本を読む楽しさに気づかせる。
- ② 好きな場面を、話したり音読したりできるようにさせる。
- ③ 自分の好きな本を選んで読み、読書の楽しさを味わわせる。

(3) 第1学年の評価規準及び、単元の評価規準、指導計画と評価計画

① 第1学年の評価規準

国語への関心・意欲・態度	国語に対する関心を持ち、進んで表現したり、易しい読み物を楽しんで読んだりしようとする。
表現の能力	自分の生活における話題や題材について考え、話をしたり簡単な文章を書いたりする。
理解の能力	話や表現に即して、話の粗筋をつかみ書かれている事柄の大体について理解する。
言語についての知識・理解・技能	音声、文学、文や文章、言葉遣いなどの国語についての基礎的な事項について理解している。書写では、文字の形、筆順、点画を理解して文字を正しく書く。

(上記の表は、熱海則夫、高岡浩二、清水静海「1年生の評価と評価規準」国土社P24、P25から引用)

② 単元の評価規準 (本はともだち「ずうっと、ずっと、大ききだよ」)

関心・意欲・態度	◎読書を楽しみ、進んでよかったところを話したり、音読しようとしたりする。 ◎自分の好きな本を選び、本の紹介をしようとする意欲を持つ。
表現	○よかったところを見つけ、思ったり感じたりしたことを話したり、書いたりする。
理解	○場面の様子や登場人物の行動を考えながら粗筋を読み取る。 ◎人物の気持ちや場面の様子を想像しながら読み、自分なりの感想をもつ。 ◎自分の読みたいところを選び、音読する。
言語	○声の大きさに気をつけて、話したり音読したりする。 ○新出の片仮名を正しく読んだり書いたりする。

③ 指導計画と評価計画 (16時間扱い)

	指導内容	主な学習活動	評価項目
第一次 ②	・範読し、挿絵をもとに好きな場面を見つけさせる。 ・好きな場面について感想を書かせ学習課題を持たせる。 ・挿絵をもとに粗筋をつかませる。 ・本文の音読練習をさせる。	・範読を聞き、印象に残った場面を話したり書いたりする。 ・本単元のめあてを知る。 ・挿絵をもとに粗筋をつかむ。 ・音読のめあてを考えながら音読の練習をする。	・挿絵をもとに好きな場面を見つけることができたか、その場面について感想を書くことができたかを評価する。
第二次 ⑧	・場面ごとによかったところを見つけさせる。 ・場面の様子や登場人物の気持ちを想像させる。 ・読みたいところを音読させる。	・一人読みし、よかったところ(好きなところ)に線を引く。 ・ぼくの気持ちを話したり吹き出しに書いたりする。 ・読みたいところを音読のめあてを考えながら音読する。	・よかったところに線を引くことができたかを評価する。 ・話す、吹き出しに書くなどは一人一人の思いを大切に評価する。 ・音読については、児童の実態に応じて授業者は口頭で評価する。 ・学習について振り返らせ自己評価させる。
第三次 ②	・本単元でよかったところを話したり、音読したりさせる。 ・ぼくに手紙を書かせ、感想をまとめさせる。	・よかったところを選んで、話したり音読したりする。 ・ぼくに感想を書く。	・選んで話したり、楽しく音読できたか評価する。音読については、音読カードにより、自己評価や相互評価をさせる。 ・ぼくに対して自分の思いを書けているか評価する。
第四次 ④	・好きな本を選び、本の紹介をさせる。 ・新出の片仮名を練習させる。	・本を選び、紹介する文をカードに書く。 ・本の紹介をし、友達の発表を聞く。 ・片仮名を書いたり読んだりする。	・選んだ本について、その理由や読んだ感想など、本の紹介ができたか、友達の発表が聞けたかを評価する。評価カードにより自己評価させる。 ・字形、筆順に注意して書けたかを評価する。

(4) 指導の実際 (第二次 第6時)

① 学習のめあて

本時の目標「エルフにたいするぼくの気持ちを想像し、話したり書いたり音読したりすることが

できる。」の具体的な学習のめあてとして、児童に次の4点を提示した。

- ア よかったところをみつけよう
- イ ぼくになっておもったことをかこう
- ウ きもちをこめてよもう
- エ きょうべんきょうしてたのしかった

※ア、イ、ウは学習の導入時に、エは振り返りの場面で提示した。

② ア「よかったところをみつけよう」

『一人読みしながら、よかったと思うところに線を引きましょう。』

(・・・でも、(a) じゅういさんにも、できることはなにもなかった。「エルフは、としをとったんだよ。」じゅういさんは、そういった。まもなく、エルフはかいだんものぼれなくなった。でも、(b) エルフは、ぼくのへやでねなくちゃいけないんだ。ぼくは、エルフにやわらかいまくらをやって、(c) ねるまえには、かならず、「エルフ、ずうっと、ずっと、大すきだよ。」って、いってやった。(d) エルフは、きっと、わかってくれたよね。(本文より)

(b)を選んだある児童は、前時で学習した「エルフは、ぼくの犬なんだ」のぼくの気持ちから、だから、ぼくのへやでねなくちゃいけないと思ったと話した。ぼくはエルフのことをかわいいと思っていた、ぼくは優しい、悲しいなどの発言もあった。

(c)を多くの児童が選んだ。「かならず」を言い換えて「ぜったい」「いつも」「わすれない」という言葉で表現した。エルフのことを「ずうっと、ずっと、大すきだよ。」とぜったいにわすれずに言ってやった、エルフをずうっとずっとわすれないよという気持ちだったなど、この部分にぼくのエルフに対する思いが込められていると読み取った。発言の際、「エルフ、ずうっと、大すきだよ。」を児童はていねいに音読した。

(a)、(d)は、授業者から問いかけた。(a)エルフは老衰で死期が迫っていることへの理解をさせる、(d)ぼくの気持ちをより読み深めさせるという意図からである。(d)では、エルフがわかってくれなかったらぼくだってかなしいからわかってきている、いつもぼくといっしょにあそんでいたのだからわかってくれたなど、児童のわかってほしいという願いが感じられるものだった。

教師は一人一人の思いを認めるうなずきや言葉かけの評価をした。また、どうしてそう思ったのか、～はどういうことだろうなど、読み深めるための問い返しを行った。

② イ「ぼくになっておもったことをかこう」

『「エルフ、ずうっと、大すきだよ。」の後をぼくになって吹き出しに書きましょう。』

書き出しは、「エルフ、ずうっと、大すきだよ。………」にそろえ、一斉読みをした後で書かせた。児童の書いたものは、次のように分けられた。

(1年1組 40名)

(A)	死という言葉を書かない。エルフを早く元気になってと励ます。	11名
(B)	エルフの死を理解しながら、どうか死なないで生きていてほしいと願う。	23名
(C)	エルフが死んでも、ずっと大好きだよ、忘れないよ。忘れないで。	6名

〈児童のワークシートから〉

- ・エルフ、ずうっと、大すきだよ。まいばん、エルフ、ずうっと大すきだよ。こういってあげるからね。かならずいっしょにねようね。ぼくのかわいいエルフ。(A)
- ・エルフ、ずうっと、大すきだよ。たいせつにしてあげるからしんじゃだめだよ。ぼくがおとなになるまでいきいてね。いつも、ずうっと、大すきだよっていってあげるからね。(B)

・エルフ、ずうっと、大すぎだよ。なんでかいだんものぼれなくなったんだい。ぼくたちはとてもエルフのことをきにしているんだよ。まえは、いっしょにあそんだじゃないか。エルフしないだね。しんだら、ぼく、一日じゅうないちゃうからね。ぜったいしないだよ。かなしいね。しぬなんて。(B)

・エルフ、ずうっと大すぎだよ。だって、まい日いっしょにすごしてきたじゃないか、エルフ。エルフがしんでも、ずうっと大すぎだよって言ってやるからね。エルフ。まい日まいばんだからね。さあ、まくらをあげるよ。じゃ、おやすみ。(C)

吹き出しの文章には、児童一人一人の読みがある。自分の一番大切な存在である者が死に直面している時、何を願うであろうか。児童の多くは、生きていてほしいと願った。死を受け入れようとする者もいたし、認めようとならない者もいた。吹き出しを書くことにより、児童はそれぞれに多くのエルフに対する気持ちを想像できたと考え。一人一人の読みを認めることが教師の評価になる。

③ ウ きもちをこめてよもう

『自分が読みたいなあとと思ったところを読みましょう。』

自分の読みたいところを音読するのを児童は喜ぶ。本時では、導入時に一人読み、まとめで一人読みと隣の席の友達に聞いてもらうという活動を入れた。指名読みでは、「エルフはきっと分かってくれたよね。」「エルフ、ずうっと、大すぎだよ。」などがあつた。気持ちを音声化することは、一人一人の読みを確かなものにするための重要な学習活動の一つであると考え。

④ エ きょうべんきょうしてたのしかった
授業の終わりにカードにより自己評価させた。

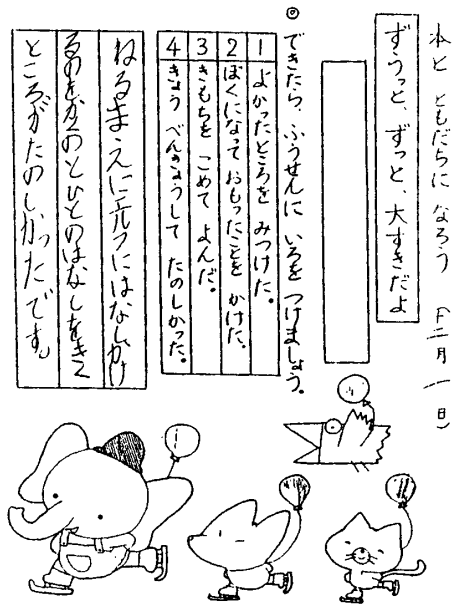
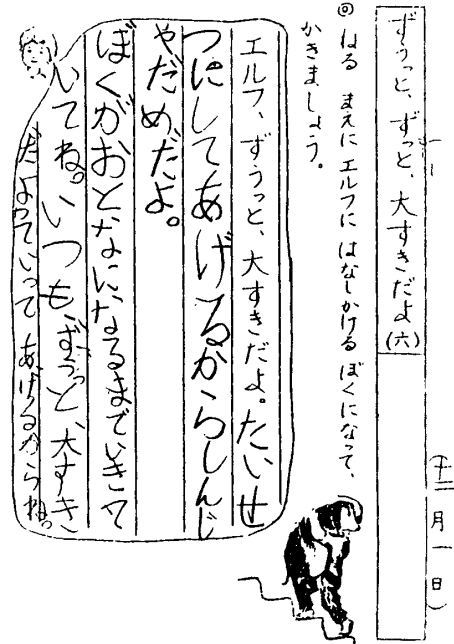
評価項目

1	よかったところをみつけた。
2	ぼくになっておもったことをかけた。
3	きもちをこめてよんだ。
4	きょうべんきょうしてたのしかった。

※1, 2, 3は風船に色塗り, 4は色塗りと自由記述

自己評価カードの自由記述における児童の反応 (1年1組 40名)

発表	21名	ぼくは、はっぴょうしてみんながほめてくれたところがちょっときんちょうしてもよかったです。
書く	15名	ぼくになっておもったことをかけたからたのしかったです。
音読	6名	本よみがたのしかったです。大きなこえでよんだのがたのしかったです。
聞く	6名	きょう, おともだちのはっぴょうをきいてたのしかったです。
共感	2名	エルフのはなしのところで, エルフがかいだんをのぼれなくてかわいそうだなあ。まだ, いきているかな。いきていてほしい。ゆめでみてみたいなあ。



児童が、「楽しかった」と感じているのは、自分の活動に対してである。学習の導入時に、活動のめあてを持つことで活動の意識化を行い、学習を振り返り自分なりの自己評価を行うことができたと考える。

4. 考察

(1) 一人一人の個性的な読みを生かす授業

本單元では、「よかった所を見つけよう」と、児童の思いから学習を進めた。児童は、教科書の文章に線を引き、「先生、見つかった」「〇〇さんと同じところだった」など、つぶやきも聞こえた。見つけることやそれを発表することが児童にとっては喜びであり、意欲につながる。学習を終えての自己評価で、学習についての感想からも、そのことが分かる。

- ・じぶんがすきなところにせんをひくのをいつもたのしみにしていました。エルフがしんだとき、すごくかなしかったです。ぼくになっておもったことをかいたときは、すごくじょうずにかけたなあとおもいました。
- ・みんなのはっぴょうをきいてすごくよかったです。みんなのはっぴょうがじょうずだったし、ぼくがはっぴょうするとき、ぼくのほうをみんながみてくれたからうれしかったです。

また、読みたい所を音読する活動では、ただ声を出して音読するだけでなく、工夫した読みをしようとしていた。本單元は、「」を使った会話文は少ないが、会話体の文章であるため気持ちを考えながら読み易い。悲しい気持ちだから、うれしい気持ちだからと考え、自分なりに登場人物の気持ちを音声化によって表現していた。自分で考えて学習する場の設定が主体的な学習者に向かう第一歩となると考える。

(2) 多様な学習活動を仕組む

「実践の概要」④の自己評価にみられるように、児童が満足感を持つ活動は、それぞれ異なっている。児童は活動したことで自己評価している。楽しんで読み、読みを深めたり広げたりするには、多様な学習活動を仕組むことが必要である。

(3) 自己を高める評価力

学習のめあてを導入時に提示することで、自分の活動として意識化を図ることができた。学習を振り返り自己評価することで、次の学習に対するめあて意識も持ち始めた。教師の支援により、自己評価もなされていく。「発表してよかった」「書いてよかった」と思える支援の仕方や教師評価を考えていくことが大切である。

(4) 楽しく読む

物語を読む学習は、個の読み→集団での読み深め→個の読みという過程である。学習後の感想には、活動に対するもの〔考察(1)参照〕や登場人物に共感するものがあった。一つの物語を学習しても、学習後には、一人一人の感じ方は違っている。読みを深めるためには、個に対応した授業づくりや評価の仕方を考えなければならない。

- ・ぼくは、エルフがすきだったです。でも、としをとってしんでしまいました。ぼくは、なみだがでそうだったです。(H君)
- ・8ばんのべんきょうで一ばんいっぱいおもったことがありました。それは・・・(T君)
- ・だいがきにいました。なぜかという、なかみをみるとほんとうにぼくが大すきだなあ、やさしいなっておもいました。・・・(Nさん)

は、活動に対するもの〔考察(1)参照〕や登場人物に共感するものがあった。一つの物語を学習しても、学習後には、一人一人の感じ方は違っている。読みを深めるためには、個に対応した授業づくりや評価の仕方を考えなければならない。

自分で好きな本を見つけることができ、読書を日常的なものにする子供をめざして、さらに取り組んでいきたい。

参考文献 熱海則夫、高岡浩二、清水静海 「総論・評価と評価規準」、「1年生の評価と評価規準」 国土社 1992年。 安彦忠彦 「自己評価」 図書文化社 1989年。